

# 留学生への作文教育 (2)

## —クラスにおける相互の高め合い—

永 澤 濟

### 要 旨

上級日本語（文章表現）クラスにおける作文教育の実践例を示し、相互の高め合いが生まれる土壌、および留学生への作文教育が何をめざすべきかについて考察する。

本クラスは、大学の社会科学系学部に属する2年生向けの通年必修授業である。前期に準備的教育、後期に本格的な執筆活動を位置づけている。執筆活動では、学生の関心や特性に配慮して課題を設定。ドキュメンタリーの要旨説明、本や映画の紹介、エッセイ、他の授業で書いたレポートの改稿といった課題において、相互の高め合いが作文を向上させた。

留学生への作文教育は、非母語の不利を克服すべく「正しい日本語」を目指すという方向性もあろうが、本授業ではそのような方針はとらない。執筆活動を自己表現と位置づけ、自己の内外をより深く見つめる機会とすることに主眼をおく。そこでの教師の役割は、書く内容を育み、書きたい内容を引き出す支援をすることであろう。相互の高め合いも、そうした支援を基盤に生まれるものと考えられる。

### キーワード

作文教育、留学生、文章表現、自己表現、相互の高め合い、教師の支援、母語と非母語、言語のルールと逸脱

### 目 次

1. 本稿の目的
2. 本稿の位置づけ

### 3. 授業の実践と結果

#### 3. 1 クラスの概要

#### 3. 2 準備的教育（前期）

##### 3. 2. 1 目的と概要

##### 3. 2. 2 結果と考察

#### 3. 3 執筆活動（後期）

##### 3. 3. 1 ドキュメンタリー『裁きの重み』の要旨説明

##### 3. 3. 2 「本や映画の紹介」の発表と紹介文執筆

##### 3. 3. 3 エッセイ「日本語とわたし」執筆

##### 3. 3. 4 レポートの改稿

### 4. 相互の高め合いと教師の支援

#### 4. 1 相互の高め合いの成果

#### 4. 2 教師の支援

### 5. 留学生への作文教育は何をめざすべきか

資料：学生の参考作品

## 1. 本稿の目的

本稿では、名古屋大学の学部留学生向け「上級日本語（文章表現）」クラスにおける作文教育の実践例を示し、クラス内で相互の高め合いが生まれる土壌、および留学生への作文教育が何をめざすべきかについて考察する。前稿「留学生への作文教育—関心や能力をどう引き出すか—」（永澤 濟2018）が個人指導にもとづく内容であったのに対し、本稿は授業における相互の高め合いに焦点をあてるものである。

## 2. 本稿の位置づけ

日本語学習者への作文教育において、仲間同士の協働的な学び「ピア・ラーニング」の一形態として、「ピア・レスポンス」の有効性が論じられてきた。ピア・レスポンスは「仲間（peer）同士で読み合い、意見交換や情報提供（response）を行いながら作文を完成させていく活動方法」（池

田玲子2004:37-38)とされ、学習者の推敲活動の中に取り入れられている。ピア・レスポンスの有効性は主として、次のように「教師からの一方的な添削」との対比で捉えられる傾向がある。

ここではピア・レスポンス推敲、教師フィードバック推敲、自己推敲の3つの方法の比較を行った。[中略] 素点で見ると教師評価を最も向上させたのはピア・レスポンス推敲であることが分かった

(池田2000:203)

書き手にとって、教師からの訂正のときよりももっと自分の作文に対する責任感が強くなることが予想される

(池田2004:45)

ピア・レスポンスは教師主導の添削指導から脱し、学習者自身の自律的な学習活動を支援する方法

(岩崎朱実2008:84)

だが本稿では、教師によるコメントや助言と、学生間でそれが行われる場合とを対比的には捉えない。その意味で、以下に示す授業実践例は、館岡洋子(2007:47)の図2「教室における教師と学習者の関係」に示されるC(「教室Bでの相互的な学びをさらに進めて、教師は環境をデザインすると同時に、一参加者として参加」)にあたる。この形態について館岡は「教師と学習者とに二分されない学び合いが起きる可能性」を指摘している。

一般に、教師と学習者の間には「垂直的相互作用」(佐藤公治1996)が必然的に生じる側面があり、学習者同士のような「水平的相互作用」(同)の関係が常に成り立つわけではない。その立場の特性や影響力は念頭におきつつ、筆者は作文の授業で学生の作品にコメントするとき、一読者として向き合い、常に書き手の選択に一つの候補を加えるという示し方をした

(母語話者として明らかな助詞の誤用などを指摘する場合を除く)。学生と教師の信頼関係が成立していれば、教師からのコメントも必ずしも「垂直的」には響かないと思われる。

つまり、授業の過程で特別に「学生同士」を意識した「ピア・レスポンス」の場(方法<sup>1</sup>)があったわけではなく、執筆活動の一部に、書き手に対する「他者」として学生も教師もともに意見を述べる機会がある、という形態である。

### 3. 授業の実践と結果

授業の概要と結果は次のとおりである。

#### 3. 1 クラスの概要

本クラスは、名古屋大学の社会科学系学部(教育学部、経済学部、法学部)の2年次に属する留学生向けの通年必修授業「上級日本語(文章表現)」で<sup>2</sup>、本年度は中国語を母語とする計5名(以下、学生A, B, C, D, Eと呼ぶ)が受講した。5名は1年次にも同じクラスで留学生向けの日本語の授業を受けており、授業開始時点で既によく知り合った友人関係であった。

学生の日本語学習歴は次のとおりである。

学生A: 2013年より日本の日本語学校で開始。2017年4月、名古屋大学入学。

学生B: 2011年より中国の中高一貫校(日本語教育に力を入れている)で開始。高校2年時、日本の高校への留学経験がある。日本の日本語学校を経て、2017年4月、名古屋大学入学。

学生C: 2009年より中国の中高一貫校(日本語教育に力を入れている。特別校のため中学開始年齢は一般の小学6年にあたる)で開始。日本の日本語学校を経て、2017年4月、名古屋大学入学。

学生D: 2010年より中国の中高一貫校(日本語教育に力を入れている)で開始。日本の日本語学校を経て、2017年4月、名古屋大学入

学。

学生 E：2016年より日本の日本語学校で開始。2017年4月、名古屋大学入学。

### 3. 2 準備的教育 (前期)

#### 3. 2. 1 目的と概要

2018年4月から7月までの前期授業では、後期の執筆活動に向けて準備的教育を行った。第1の目的は、様々な日本語表現に出会い、表現の幅を広げること、第2は、視野を広げ多角的な見方を養うことである。

概要は次の通りである。1～2分程度のニュースビデオ (下記一覧) および記事を素材とする。各自が聞き取った (読み取った) 「テーマ・内容」を簡潔にまとめ、全体で確認し合う。ビデオはシャドーイングとディクテーションを、記事は精読をし、教師が表現や内容の解説をする。ディクテーション後はスクリプトを配布し、聞き取れなかった点を各自で修正し、自分自身の聞き取りのポイントを意識化する。最後にディスカッションをして考えを文章にまとめる。

#### 【素材としたビデオ・記事一覧】

ビデオ「細菌汚染のメロンが豪から輸入 厚労省が注意呼びかけ」

[NHK / 2018年4月10日]

記事「手話で弁護活動 中国人弁護士」

[東方新報 (AFP 通信による配信) / 2018年4月16日]

記事「手話弁護士ががんばる 夢つかんだ田門浩さんの1年

[朝日新聞 / 1999年5月5日]

ビデオ「都内小学校で入学式 “アルマーニ制服” 小学校は厳戒態勢」

[TOKYO MXNEWS / 2018年4月6日]

記事「ビートたけし「何が服育だ!」」

[東スポ Web / 2018年2月20日]

ビデオ「カモの親子 国道横断しようと」

- 〔NHK / 2018年6月6日〕  
ビデオ「是枝裕和監督「万引き家族」カンヌ映画祭で最優秀賞」
- 〔NHK / 2018年5月20日〕  
ビデオ「屋根裏の花瓶 21億円で落札 実は清朝時代の磁器 フランス」
- 〔NHK / 2018年6月13日〕  
ビデオ「「逮捕＝犯罪者扱い」愛知県警の痴漢撲滅ポスターに批判」
- 〔NHK / 2018年6月4日〕  
ビデオ「飛騨路に春 古い町並みの水路にコイが引越し」
- 〔NHK / 2018年4月8日〕  
ビデオ「77万年前の地層「チバニアン」天然記念物指定を答申」
- 〔NHK / 2018年6月15日〕  
ビデオ「劉曉波氏死去から1年 香港・台湾・ドイツで追悼式典」
- 〔NHK / 2018年7月14日〕  
ビデオ「ソフトバンク インド太陽光発電事業に6～10兆円規模の投資へ」
- 〔NHK / 2018年6月15日〕  
ビデオ「福島第二原発の廃炉検討 “町づくりの議論が重要”」
- 〔NHK / 2018年6月15日〕  
ビデオ「IMF 米政権の保護主義的政策「世界経済にとって破壊的」」
- 〔NHK / 2018年6月15日〕  
ビデオ「米中対立は「貿易戦争の様相」経済同友会代表幹事が懸念」
- 〔NHK / 2018年7月12日〕
- 記事「(社説) 働き方法成立 懸念と課題が山積みだ」  
〔朝日新聞 / 2018年6月30日〕
- 記事「働き方関連法 過労死防止に逆行 遺族ら反発と嘆き」  
〔朝日新聞 / 2018年6月30日〕
- 記事「教えて！働き方改革関連法 4 高年収の専門職に適用「高プロ」とは？」  
〔朝日新聞 / 2018年7月19日〕

### 3. 3. 2 結果と考察

第1の目的「様々な日本語表現に出会い、表現の幅を広げる」についてみると、学生たちはテーマを的確に捉え、ディクテーションは9割以上の正確性、ディスカッションもスムーズに行われ、達成度は高かった。アンケートにおける学生自身の評価は図1のとおりであり、力の向上が概ね自覚されていた。自由記述に「先生の補充説明（特に単語や言葉遣いの習慣）がすごく役に立って良かったと思います」とあり、教師の解説にも意義が見出されたようである。

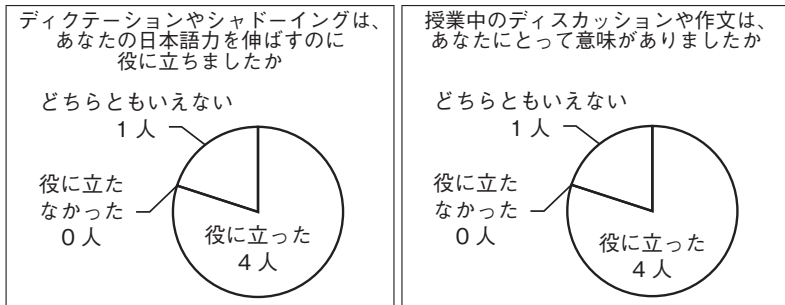


図1 力の向上に関する学生自身の評価

第2の目的「視野を広げ、多角的な見方を養う」に関しても、学生たちはディスカッション等の活動に意欲的に取り組み、日本や中国、および世界の多様な問題をそれぞれの視点で捉えていた。図2のアンケート結果によれば、学生が課題に興味をもてたかどうかは区々であったが、「アルマーニの制服のニュースが教育関係だったので、とても役に立ちました」「経済のニュースも結構ありましたので（専門の授業に役に立った）」「日本語だけではなく、色んな面でいい勉強になりました」等の感想が自由記述に示されており、学生の関心や専門に何らかの働きかけができたといえる。この点は、ビデオや記事の選定にあたり学生の関心や特性、時事性、テーマのバリエーション等を積極的に考慮したことの成果であったとみることができる。

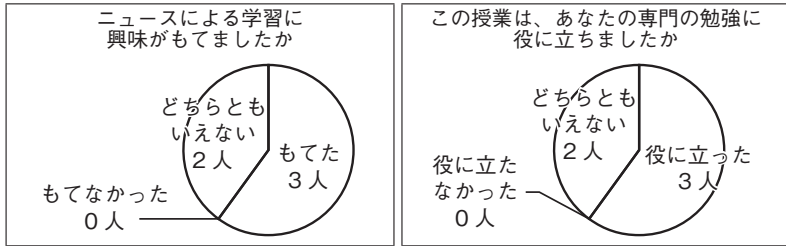


図2 授業が学生の関心や専門にどう関与したか

アンケートから浮かび上がった課題は、図3に示すように授業のレベルが「簡単すぎた」とする学生が2名いたことである。上述のように、シャドーイングやディクテーションの到達度の高さが「簡単すぎた」との印象につながったとみられる。また自由記述に「ニュースの聞き取りは全て原文と一致する必要がないと思う」「ニュース以外のものもたまに見たいです」「ニュースの他にドキュメンタリーも良いと思います」とのコメントがあった。細部における過度な正確さの要求やパターン化した学習といった印象を学生に与えたとみられる。いずれの点も後期に向けて検討課題とした。

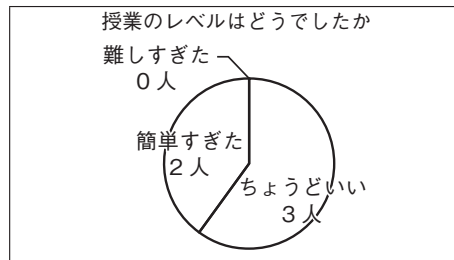


図3 授業のレベルについての印象

全体としては、図4に示すように学生は前期の授業に概ね満足したとの回答であった。授業の目的(上述)の達成に加え、毎回の授業冒頭のコミュニケーションやディスカッション等の機会を通じて学生と教師の関係、学生同士の関係が深まっていったことも、後期の授業基盤として重要な要素



となった。

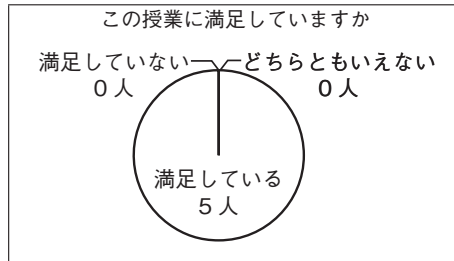


図4 前期授業全体の印象

### 3. 3 執筆活動 (後期)

後期は本格的な執筆活動に入った。各執筆課題 (ドキュメンタリーの要旨説明、本や映画の紹介、エッセイ、他の授業で書いたレポートの改稿) ごとに概要と結果を述べる。

#### 3. 3. 1 ドキュメンタリー『裁きの重み』の要旨説明

最初の課題として、50分弱のドキュメンタリー番組『裁きの重み—名張毒ブドウ酒事件の半世紀—』〔NNN ドキュメント'06 (制作: 中京テレビ) / 2006年11月26日〕の要旨説明に取り組んだ (授業3回分)。前期の短いビデオ・記事を素材とした準備的教育から、後期の本格的な執筆活動へ移行するための、橋渡しの位置づけとした。次の課題「本や映画の紹介」を視野に入れ、素材はドキュメンタリー番組を選んだ。情報の取捨選択、文章構成を意識するうえで有効であることに加え、前述の学生アンケートで「ドキュメンタリー」の要望があったことによる。内容は、地元、中京テレビによる名張毒ブドウ酒事件の死刑判決をめぐる番組とした。60年近く前の事件が今なお司法や社会に重い問題を問いかけ続けている事実を、社会科学系専攻の学生たちに知り考えてほしいと考えた。

第1回は前半30分を視聴し、400字程度で要旨を執筆した。この時点で、教師は執筆についてほとんど解説をしなかった。第2回冒頭で、各自執筆した要旨をクラスで共有し、教師から「番組を見ていない人にどう伝える

か」をあらためて問いかけた。「情報の取捨選択」(5W1Hを意識)、「構成の工夫」の2点をポイントとして挙げた。前期は自身の理解に重きをおいていたが、後期の執筆活動では他者に「どう伝えるか」に自覚的であるようにと伝えた。

それらをふまえて学生が互いに意見を出し合った結果、要旨には事件の経緯、奥西氏への死刑判決と無罪の主張、証拠がないこと、再審請求へ向けた弁護士たちの証拠探し、検察の「最良証拠主義」、裁判の原則「疑わしきは被告人の利益に」、冤罪の問題等の内容を盛り込むべきとの結論に至った。さらに、第3回に後半を視聴し、ドキュメンタリー全体の構成について話し合った。前半が「事件とその後の裁判のいきさつ」であったのに対し、後半は「最新の現状」、奥西氏家族や元・死刑囚の姿を通して「本作が伝えたいこと」が示されているとの見方に至った。最後に、複数の事典類で本事件がどのように記述されているかを見て、視点の多様さを確認した。

学生たちは意見を出し合う過程で、情報を精緻に整理していった。同時に、視点の違いによって伝えるポイントが異なることを実感したと思われる。学期末のアンケートに「ドキュメンタリーの内容を要約するのが苦手だったが、授業でみんなで内容の情報共有し、要約の練習ができるのがすごく役に立ったと思います」とあり、他者との意見交換を通しての力の向上が自覚できたようである。本課題への学生の印象は図5のとおりであった。

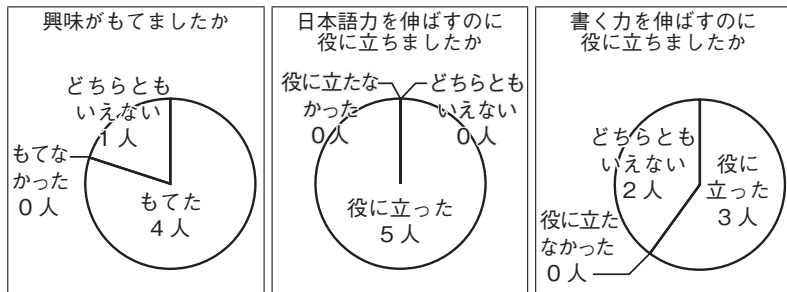


図5 課題「ドキュメンタリーの要旨説明」についての印象

### 3. 3. 2 「本や映画の紹介」の発表と紹介文執筆

第2の課題として、「本や映画の紹介」の口頭発表（授業2回分）と、紹介文執筆（同3回分）に取り組んだ。第1回に課題の趣旨を伝え、自分が好きな本や映画を紹介し、それを通して「自分」を伝える、といったことを説明した。本課題の主眼は「自己表現」である。作品の「説明」という点で前回の課題を受け継ぎつつ、新たに自己表現を意識化するための課題として位置づけた。学生には、どのような作品を紹介するか、なぜそれが好きかといった点に「自分」が表れることを解説した。説明の後、発表原稿を執筆した。

第2回は1人15分程度の口頭発表（質疑応答、コメント含む）を行った。本授業のTA（本学大学院生）1名をゲストに迎えたことで、他者に伝える意識がより高まったとみられる。発表後のコメントでは互いに、昨品の魅力や好きな理由が伝わったこと等を称え合ったと同時に、「作品の背景となる中国の現状をもっと伝えたほうがよい」「なぜこの作品を取り上げたのかを伝えるとよい」「作品がアピールしたい内容を伝えたらどうか」等、今後に向けての助言も交わされた。ゲストのTAからも、各発表の長所の具体的な評価と、今後自己表現として高めていくためのアドバイスがなされた。

第3回は、前回の発表や互いのコメントをふまえて、「本や映画の紹介」を文章にまとめた。教師からは、3点のポイント「魅力的な構成（何から書くか、あらすじをどこまで書くか、不要・追加すべき内容はないか）」「自分らしさ（テーマ・内容の選択自体が自己表現だが、自身の経験や考えをあわせて示すとよい場合がある）」「的確な表現」を示した。

第4回で、各自執筆した紹介文をクラスで共有し、コメントし合った。「台詞の引用が絶妙」「作品の先見性の高さをよく伝えている」「筆者の視点でのまとめがいい」「作品の紹介でもあり筆者の考えの表明でもある点がすばらしい」「複雑な社会的背景を筆者の言葉で伝えている」「社会背景の説明により作品の深い意義が感じられる」「筆者の熱意が伝わる文体」「流れ・構成が的確」等、多様な観点で長所があげられた。互いの作品を読み、

それぞれに多くの気づきがあったようだった。また改稿に向けての助言として、「個人的な感想だけでなく社会的な影響にもふれたらどうか」「客観的な紹介だけでなく個人的な視点での作品評を示したらどうか」「一文を短くした方がいいのではないか」「中国で上映されなかった理由を知りたい」「口語的文体を文章表現に改めたほうが良い」等のコメントがあった。

第5回で、それらをふまえて最終稿を書いた。参考作品2点を本稿末に示す。学期末のアンケートでは「他の人の興味・関心を知ることもできて、すごくおもしろかったです」等の感想があった。紹介された作品を、クラス外の友人と話題にした学生もいた。図6にみえるように、本課題への学生の関心は高かった。

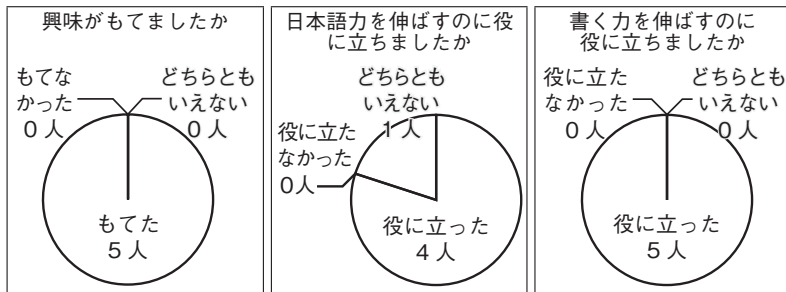


図6 課題「本・映画の紹介」執筆についての印象

### 3. 3. 3 エッセイ「日本語とわたし」執筆

第3の課題として、「日本語とわたし」をテーマとするエッセイの執筆(授業4回分)に取り組んだ。

第1回に「文章の基本」として、永澤(2018)の作文指導でも示した3点のポイント「①〈内容〉自分にしか書けないことを書く(自分を表現することであり、奇をてらうことではない。随想でも論文でも同じ)」「②〈形式〉誰にも伝わるように書く(シンプルに書く、人に伝えることを意識する、日本語を正しく使う)」「③〈演出〉(余力が出てきたら)様々な効果を考える(より適切な表現の検討、比喩などの効果、文章展開の工夫(内容を取捨選択する、時系列に沿って書く必要はない)、効果的なタイトル)」

を確認した。課題をとおして、自身や日本語をあらためて見つめる機会にしたいとの意図もあった。

構想の補助とすべく、多和田葉子氏のエッセイ「すべて、ころんで、かかとがとれた」(『カタコトのうわごと』所収)、同「言葉を綴る」(『エクソフォニー—母語の外へ出る旅』)等を紹介した。折しも直前に多和田氏の小説『献灯使』英語版が「全米図書賞」の翻訳文学部門を受賞したところであったため、受賞を伝える新聞記事も示した。多和田氏は日本で生まれ、1982年にドイツに渡り日独語の両方で多数の小説や詩を発表しており、作品の中には言語の境界を鋭く見つめるエッセイも多い。たとえば次のくだりは、日本で学び、日本語で文章を執筆する学生たちに響くところがあるのではないかと考えた。永澤(2018)にも述べたように、作品例を作文教育の導入期に示すことは、よい作品を執筆する契機になり得ると思われる。

ひょっとすると、「自然」「不自然」「うまい」「へた」という言葉は、差別用語ではないのか。これが自然な美しい日本語で、それ以外の日本語は駄目だという言い分には根拠がない。日本語はこれとは全く違った風にかかれたり話されたりしてもいいのではないのか。それが、日本語を使って生きる人達(日本に暮らす外国人や、外国に暮らす日本人も含めて)の生に、より近づくのならば。とにかく、わたしの書きたいものを表現するには、普通の日本語では無理だと感じた。その結果、かかとのない小説が生まれたのだとも言える。

(多和田葉子「すべて、ころんで、かかとがとれた」より)

日本でドイツ語を勉強している人にも、ドイツ語で日記をつけることを勧めたい。文法、スペル、その他、いろいろ間違いを犯すかもしれないが、そういうことは取り敢えずあまり気にしないで、書きたいことをなるべく楽しんで書く。面白いのは、日本語では恥ずかしくて書けなかったかもしれないようなことを平気で書けることもあるということだ

ある。そうやって、毎日書いているうちに、綴られた文章の連なりが織物のようなもう一人の自分を生み出していくかもしれない。外国語を学ぶということは、新しい自分を作ること、未知の自分を発見することでもある。

(多和田葉子「言葉を綴る」より)

以上をふまえ、第2回に800字のエッセイを執筆し、第3回に作品をクラスで共有して互いにコメントした。「好きな言葉を出発点にしている独特の視点が斬新」「Bさんらしい作品。生活のごく普通のできごとを面白く描き、何かを伝えることが得意」「日本語から始まって留学の話題に展開していく構成がすばらしい」「面白い日本語表現を取り上げている」「日本語の勉強や留学の経験について共感する点が多い」等の感想が述べられた。改善点についてのコメントはほとんどなかったが、他者の作品にふれることで、自身の執筆にいかせる点を各自で見出したようだった。教師からは、テーマを絞って書くことや書き出しの工夫等についてコメントした。

第4回に最終稿を執筆した。本稿末に、参考作品として2点の初稿と最終稿をそれぞれ示す。2点とも、最終稿ではテーマが改変、または大きく絞られた作品である。

学期末のアンケートによると、本課題への学生の印象は図7のとおりであり、必ずしも興味をもてなかったようだが、どの作品も初稿から最終稿にかけて向上がみられ、それぞれの観点で気づきが得られたようであった。エッセイは芸術性の要素も含むため、母語以外の書き手にとって難しさを感じやすいジャンルであるが、「普段、日本語でエッセイを書くことがあまりないので、すごくいい機会になりました」との感想があり、執筆の機会を提供したことに意義があったと考えられる。また「日本語を勉強し始めた理由をもう一度振り返るきっかけとなったのでありがたかったです」とあり、自身を振り返る機会にもなったようである。

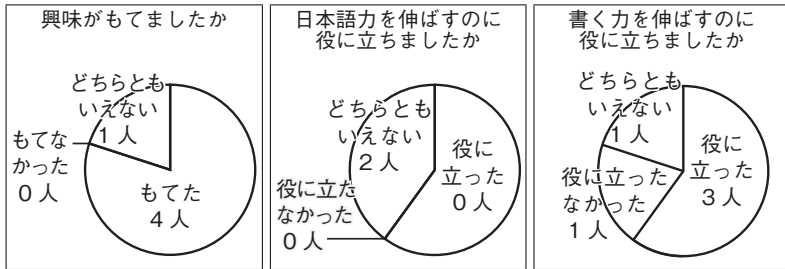


図7 課題エッセイ執筆についての印象

### 3. 3. 4 レポートの改稿

最終課題はアカデミックライティングに取り組んだ(授業3回分)。他の授業等で書いたレポート1点を持ち寄り、改稿に向けて検討を加え、互いにコメントし合うという内容である。

第1回に、3点のポイント「形式を見直す(本文の構成、セクション分け、他者と自己の考察の区別、等)」「内容を深める(独自性のあるテーマ、データ、考察)」「述べ方の再検討(根拠となる事実を示して客観的に、テーマを絞り掘り下げる)」を示し、互いの作品を読み合った。

第2回で互いにコメントを出し合った。内容に関する助言をする場合には、即時的な修正点のみならず、今後のレポートや卒業研究等を視野に入れた中長期的な視点でも行うよう伝えた。長所として「構成が明確でわかりやすい」「歴史的背景が示され理解が深まる」「用語の定義が示されている」「視点がとてもいい」等が指摘された。今後へ向けてのコメントとしては「改善策がやや抽象的で従来の枠にとどまっているので、問題を1~2点に絞って深く検討したらどうか」「この視点は、文化論につなげられるのではないか」「序論と結論の対応関係を明瞭にした方がよい」といった見方が示された。当該のテーマを今後も追究するつもりかどうかに関わらず、学生たちは様々な課題をみつけたようであった。

第3回では、小林康夫・船曳建夫(編)『知の技法』より、船曳建夫・門脇俊介・長谷川寿一「表現の技術—他者理解から自己表現へ」を参照しながら、あらためてアカデミックライティングの基礎を解説した。特に、

テーマの設定と客観的な議論のしかたについて確認した。テーマの設定に関しては、既に前回の学生のコメントの中で、「問題を1～2点に絞って深く検討したらどうか」という提案がなされており、この点が、同書 p.216 の「論文のテーマは「範囲を狭めるほど、仕事は良くなり、基盤がしっかりする」(ウンベルト・エーコの『論文作法』における指摘)」に重なるものであることも強調した。参考書類から取り入れる知見より、学生自らが経験的に到達した知見の方が重みがあろう。それをクラスで共有できたことは、他の学生にとっても貴重な機会となった。学期末のアンケートには「みんなのレポートを読み、かつコメントしあい、先生からのアドバイスももらえて、これからの勉強にすごく役に立ちました。そしてレポートを書くのが、もう怖くないと思います」「正しく、客観的にレポートや文章を書くことを心掛けていきます」「これから文章を書く時は以下の3点を常に意識したいと思います。①わかりやすさ、②自分の主張、③確実性です。これをふまえて文献研究を行ったり、調査したりして、より良い論文が書けるように努力したいです」とあり、それぞれにポイントを意識化できたようである。本課題への学生の印象は図8のとおりであった。

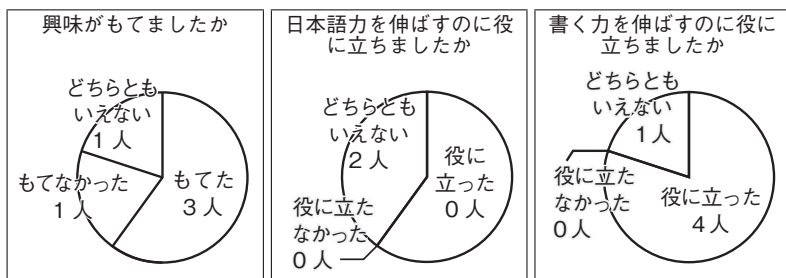


図8 レポートの授業についての印象

#### 4. 相互の高め合いと教師の支援

##### 4. 1 相互の高め合いの成果

以上のように、当クラスの5人の学生は、それぞれの作品の長所を互いに温かい視点で捉え、同時に改善のためのポイントも鋭く見抜いた。この



ような認め合いの関係は、一人での執筆では得られない気づきを与え、今回の作文教育の質を大きく高めたといえる。また、自己表現はときに勇気を伴うが、学生たちはそれを臆さなかったし、自分の作品がクラスメイトの目にふれることに対しても自然体であった。そのようなクラスの関係性と個々の態度が、執筆活動を支える土壌となった。

そして、他者の作品に接して得られた気づきは、それぞれの作品に影響を与えた。本稿末のエッセイ2作(学生A, E)の、初稿から最終稿への変化もその好例といえるだろう。

このような相互の高め合いが、自身や作品を客観的に見つめる契機となり、書くことに意識的に向き合う基盤になったといえる。

学生Bは1年の授業を終え、「今まで文章を書くことになりかなり苦手意識が強く、怖いと感じていました。しかし、一年間の授業を通して、だんだん書くことに慣れ、自信ももつようになりました」と述べている。書くことに対する意識がこのように変化し、自信をもてたことは意義深い。本稿末の学生Bの紹介文とエッセイは、いずれも自己を力強く表現する作品になっている。互いに高め合い、書くことに意識的に向き合った成果と捉えることができる。

#### 4. 2 教師の支援

作文教育において、教師は学生の学びをどのように支援し得るだろうか。一般に、作文への教師の関与は次のように「添削＝教師の価値観の押し付け」と捉えられることがあり、それを克服する手段として「ピア・レスポンス」が紹介されている。

「添削指導を中心とした作文学習は、極端な言い方をすれば、教師に読んでもらうために書く文章だから教師に正しいと判断され、教師に面白いと評価されるものを書くことが隠れた学習目標となっています。一方ピア・レスポンスは現実の読み手を明確にした学習であり、誰に読まれるものであるのか、何を伝えたいのか、どう伝えるのかという作文の

目的と意図、手段が明確にされる学習方法です。また、読み手と書き手との間で行われるレスポンス活動は、文章を媒介とした対面のコミュニケーション活動です。こうした点でピアレスポンス<sup>〔ママ〕</sup>は、添削指導にあった大きな問題点を確実に克服できる活動として期待できるものだと言うことができます」(池田2004:83-84)

しかし、教師は必ずしも「正しさ」を上から与えるものではない。第2節で本稿の立場として「教師によるコメントや助言と、学生間でそれが行われる場合とを対比的には捉えない」ことを示したが、教師は学生自身の気づきを促す存在として、執筆活動に関与することができる。永澤(2018)で「指導者は、学生の〈書きたい内容〉を引き出し発展させられるよう、原稿や対話を通して学生の関心を汲み取る姿勢をもつ」ことの重要性を述べたが、教師に求められるのは、学生が自身の個性や魅力に気づき、自身を書きたい内容に出会うための支援であろう。

子どもたちの作文指導に情熱を注いだ国語教師、大村はま氏は次のように述べている。

教室で、「さあ、書いてごらん。」と言うと、すぐ書けるんでしょうか。そんなわけにはいかないと思います。いちおう、いっせいに事前指導をしたからって、すぐに書きだせるものじゃない。〔中略〕私たちは教師という専門職を持っているんです。一つの職業ですね。それは、なんにも書けなかった子どもを書かせるようにする職業なんです。

(大村はま「教えるということ」)

その子はそれをじっと見ていましたが、しばらくたったら泣き出してしまいました。「どうしてもわからない。その時のことを覚えてもいないし、どうして書いていいのか、わからない」と申しました。私はその子がポロポロ涙をこぼすのを見て、自分の指導力のなさがひしひしと胸にきまして、私もいっしょに涙がこぼれそうでした。私は思わず、「行っ

たのはお祭だったんでしょう。その時、どういうお店があったの。」というようなことを聞きはじめました。すると、涙ながらに、「こういうお店があってね。こうだった。」と言うのです。「ああ、あのお祭ならわたしも行ったけれど、こういう亀を売っているおじさんがいたでしょう。こんな歌、歌っていなかった。」といました。そしたら「いた、いた」と涙ながらに申します。「それ書けばよかったじゃないの。」と言いましたら、上のところにその事を書いたのです。[中略] それで、その文章がだいたい二倍半くらい長くなったのです。長いばかりが能でありますまい。けれども、そのもとの、お祭に行きました、どこどこを歩きました、こうでした、こうでした、おしまい、という作文が急に生き生きとしてきました。

(大村はま「教師の技術」)

生徒が、小泉八雲の怪談が読みたいと言って来ました。それで、私が小泉八雲を探してやりますと、「まだ三ページぐらいしか読んでいないので、ちゃんとした感想は書けませんスリラーものです。」と書いてあります。そこで、「『耳なし芳一』を読んで、少しおっかないところもありましたが、おもしろくてもっと読みたいと思います。」と書いてやりました。ぞっとするところを考えて書かなければならないというふうにさせたわけです。[中略]「日本の民話」というのを讀んだ子がいました、「日本の昔話を五十ぐらい集めた、おもしろい親しみやすい本だと思った。それに、その話にその地方の方言を使って書き表しているのもよいと思った。また、口絵もきれいな影絵がいくつもあって、読んでいて楽しくなるような本だった。」こういう外側のことしか書かなかったわけです。ですから、そのあとへ、「また、これらの子どもにもよくわかるようなお話の中に、昔の人のものごとに対しての考えを想像してみると、」と書いてやりました。写真がきれいとかいうことだけの書き手の心を少し引っ張ろうと思ったのです。

(大村はま「教師の技術」)

大村氏は、教師が「書いてごらん」とただそれだけを投げ出すことの無責任を説いている<sup>3</sup>。それは、子どもの作文であっても、大学生の論文であっても、基本的には同じことであろう。執筆に入る際の素材の選択、執筆過程での問いかけ等を教師が適切に行うことにより、学生は、自身の中に「既に」もっている、書くべき内容に出会っていくことができる。その基盤として、教師は幅広い視野と柔軟な姿勢をもち、自身の専門性を高めていくことが必要であると思われる（永澤2018）。そのような教師の支援のもとで学生が個性・能力を発揮することができれば、クラスは多様な視線の行き交う、高め合いの場になるであろう。

## 5. 留学生の作文教育は何をめざすべきか

最後に、留学生の作文教育は何をめざすべきかについて考えたい。

当クラスの学生たちは、今後の文章執筆との向き合い方について学期末のアンケートで次のように述べている。

「文章はいろんな目的とテーマがあると思いますので、今後文章を書く時はまずその目的とテーマをきちんと理解した上で、論理や根拠に基づいて書くようにしていきたいです」

「文章各部分の作用と果たすべき役割をこの一年間の授業を通じて再明確することができたと思います。この貴重な経験と知見を踏まえた上で、今後はより伝わる文章を作成するのを目指しています」

「法律分野の研究において、用語の明確さと論理のロジックがとても重要な要素で、よって、日本語能力の要求はとてもハイレベルだ。今後の研究にも向けて、日本語の言葉の選択と文法の使い方をもっと慎重に選択しながら、専門の解答と文章を書きたいと思う」

これらのコメントは主に内容面に関するものであり、外国語での執筆に

特化されない問題意識の表出となっている<sup>4</sup>。留学生への作文教育は、非母語の不利を克服すべく「正しい日本語」を目指すという方向性もあろうが、本授業ではそのような方針はとらなかった。執筆活動を自己表現と位置づけ、自己の内外をより深く見つめる機会にすることに主眼をおいた。

それは、文章を書く最大の目的は「何かを伝えること」との考えによる。何か伝えられるのであれば、言語の用法は母語話者と一致していなくてもよいのではないか。英語で小説を書いた作家、ジュンパ・ラヒリ (Jhumpa Lahiri) は、外国語であるイタリア語による執筆活動を始めることを決意し、その稀有な経験について次のように表現している。

彼ら [引用者注:「インテルナツィオーレ」誌の編集者] は新しい言語で表現したいというわたしの願いを理解してくれ、わたしのイタリア語のおかしさを尊重し、不完全で少しごちない文章の実験的な性質を受け入れてくれた。[中略] 彼らのおかげで、わたしはこの言語の、そして創作上の飛躍ができた。新たなイタリア人の読者を獲得し、とうとう私の新しい部分に到達することができた。

(ラヒリ、ジュンパ「足場」)

言語というものは一定の文法ルールに則っているからこそ正確に伝達できるわけだが、そこには振れ幅もあり、逸脱もあり、およそ個人の文体(個性)や芸術性などはそのようなところから生まれたりもする。本授業の根底にはそのような言語観がある。フランス文学者(映画批評家)の蓮實重彦氏は、氏自身の日仏両語に彩られた家庭生活と職業上の経験から、言葉の「秩序」について次のように述べている。

というのも、かりに言葉がおさまるべき理想的な秩序があったにしても、その秩序の全貌を一目で把握しうるものは誰ひとりとしておらず、われわれが目にしていないのは、たえず露呈した言葉の表層にすぎないからだ。秩序と思われたものは、ごく局部的な世界で凝固したかにみえる

言葉たち、つまりは慣用というやつだ。そして、どうやら一定の秩序におさまっているかに見える慣用についてなら、その慣用を共有する人びとにとっての美しきなり正しきなりは口にしうるだろう。だが、その美しきと正しきの背後には、たえず凝固することのない言葉のうねりが、無秩序に渦巻いている。美しい日本語への郷愁も、正しい日本語への展望も、凝固する言葉の背後へと視線を注ぐ姿勢をとり、あえず忘れたふりを装うことによってはじめて可能となるに過ぎない。だが、怖ろしいのは、このとりあえず装われた忘却が、いつしか真実の忘却へと変容してしまうことだ。

(蓮實重彦「パスカルにさからって」)

こうした言語観にもとづく場合、作文教育で重要なのは、固定化した「正しい日本語」に固執することなく、書く内容を育むことに帰結する。先述の大村はま氏の教育方針を解説するなかで、井上敏夫(1983:377)は次のように述べている。

とりわけ、文章の表現形式の問題をあげつらう前に、大村先生にとって、作文指導の最大の眼目とされるのは、まず書く事柄、書くべき思想内容を育てるということである。書く事柄さえ、深く確かに所持していれば、文章表現はおのずから形をなして湧き出てくるものである、という強い信念である。

(井上敏夫「(解説)『やさしい文章教室』について」)

表面的な形式よりも、表現するに足る自己を育てることに重きをおく教育方針である。この発想は、永澤(2018)で述べた、〈書きたい内容〉と〈書ける内容〉が乖離している場合に〈書きたい内容〉の方を評価し尊重する、との考えにも通じるものである。

作文教育において教師は、書く内容を育み、書きたい内容を引き出す支援をしていくことが有効であろう。本稿がテーマとした「相互の高め合い」

も、そうした支援を基盤に生まれるものといえる。

## 注

- 1 池田(2004:87)では、「ピア・レスポンスを採用した作文コースでは、ピア・ラーニングの学習観やピア・レスポンスの活動意義と方法の説明を丁寧に行います」とし、ピア・レスポンスを学習の「方法」として、学習者にも明確に提示している。
- 2 本授業は文学部2年次に属する留学生にも選択科目として開かれているが、本年度は選択者がいなかったため、社会科学系学部の学生のみクラスとなった。
- 3 一方で、大村氏の「作文を書くときは、題材集めにヒントを出し、書き始めの一文を与えてやることもあった」といった指導法に対しては、批判も向けられた。これについて、荻谷夏子(2012:181)は、「大村が直面した最大の批判でもあった。てびきという名で、子どもをある型にはめ、個性を失わせている。その子らしい考えの自由な発露を促さずに、教師の枠の中で動かしているだけだ。教えすぎである。生徒の考えを教師がいじっちゃだめだ、そんなふうに言われた。戦後の民主的な、子ども中心主義的な人々の目には、好ましくない教育として映った。そういう思潮が、平成に入ると、指導より支援を、という教育政策にも結びついたのでだろう」としている。荻谷氏によれば、大村氏はそれらの批判に自省的であった。そのうえで、最終的には「そのやりかたが、不器用で柔軟性や多様性に欠けていたら、押しつけになる。十分にこなれていて、その子どもをよくよく知っていて無理がなく、幅広くものを見ていて、生徒との信頼関係も成り立っていたなら、生徒は押しつけとも思わずに、ああ、助かった、そうか、そうすればいいのか、そんなやりかたもあったのか、と、そのてびきを存外すっきりした顔で受け取る。そして、本当に適切に手際よく示されたてびきというのは、自然で、無理がないので、その存在感がかえって薄れ、子どもは自力で進んでいるような気持ちで学ぶ」との持論に行き着いたという。
- 4 伊豆原英子・嶽逸子(1997:150)は、「情報伝達学習」の指導について考察するなかで「学習者が上級であればあるほど、学習者の持つ問題は母語話者のそれに近付いていく」と指摘している。

## 参考文献

池田玲子(1999)「日本語作文推敲におけるピア・レスポンスの効果—中級学習者

- の場合」『言語文化と日本語教育』17, pp.36-47.
- 池田玲子 (2000) 「推敲活動の違いによる推敲作業の実際」『お茶の水女子大学人文科学紀要』53, pp.203-213.
- 池田玲子 (2004) 「日本語学習における学習者同士の相互助言 (ピア・レスポンス)」『日本語学』23-1, pp.36-50, 明治書院.
- 伊豆原英子・嶽逸子 (1997) 「上級独話教育」藤原雅憲・初山洋介『上級日本語教育の方法』, pp.137-151, 凡人社.
- 井上敏夫 (1983) 「(解説)『やさしい文章教室』について」『大村はま国語教室 第十四巻』, pp.373-391, 筑摩書房.
- 岩崎朱実 (2008) 「ピア・レスポンス的手法で作文はどのように推敲されたか—中上級学習者のための作文授業の報告—」『高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門紀要』2, pp.84-98.
- 大村はま (1972) 「教師の技術」(広島県木下学園祇園高校での講演)『大村はま国語教室』第11巻, 筑摩書房.
- 大村はま (1973) 「教えるということ」(『おしえるということ』共文社)『大村はま国語教室』第11巻, 筑摩書房.
- 苅谷夏子 (2012) 『大村はま 優劣のかなたに一遺された60のことば』筑摩書房.
- 佐藤公治 (1996) 『認知心理学からみた読みの世界』北大路書房.
- 館岡洋子 (2007) 「ピア・ラーニングとは」池田玲子・館岡洋子『ピア・ラーニング入門—創造的な学びのデザインのために』第3章, pp.35-69, ひつじ書房.
- 多和田葉子 (1999) 『カタコトのうわごと』青土社.
- 多和田葉子 (2003) 『エクソフォニー—母語の外へ出る旅』岩波書店.
- 永澤済 (2018) 「留学生への作文教育—関心や能力をどう引き出すか—」『名古屋大学日本語日本文化論集』25, 83-103.
- 蓮實重彦 (1977) 「パスカルにさからって」『反=日本語論』筑摩書房.
- 船曳建夫・門脇俊介・長谷川寿一 (1994) 「表現の技術—他者理解から自己表現へ」小林康夫・船曳建夫(編)『知の技法』, pp.209-267, 東京大学出版会.
- ラヒリ, ジェンパ(2015) 「足場」『べつの言葉で』中嶋浩郎訳, pp.117-127, 新潮社.

(ながさわ いつき・准教授)



## 資料：学生の参考作品

### 【「本や映画の紹介」作品例1（学生A）】

#### 映画「罪の手触り」

「罪の手触り」は、ここ数年、実際に中国全土を揺るがした4つの事件を通じて、ひたむきに生きる等身大の人間たちを描き出した。中国は高度経済成長を続ける一方、地方行政の腐敗、貧富の格差や若者の自殺などが社会問題となっている。映画は、4つの物語を通じて、罪を犯した彼らの心情や葛藤に寄り添っている。

最初の山西省の事件は、社会が生んだ暴力、司法・法律的な暴力である。村の共同所有者だった炭鉱の利益が裏闇の取引によって実業家と村長に独占されたことに怒った炭鉱労働者は、特権や社会的不正に直面し、他者とコミュニケーションを欠いたとき、弱者は尊厳を守るために、最も安易で有効な方法として暴力という方法を選び、そういった社会から生まれた事件である。

二つ目の事件、各地で強盗殺人を繰り返す寡黙な男の個人に根ざした暴力である。窒息しそうな閉ざされた地方に暮らしている主人公は、そこに暮らしていても、生き生き暮らせないことに絶望し、精神的困難や無力感と戦っている、二つ目の事件の主人公は、つまらない村の暮らしで命を輝かすことができない中、拳銃が鳴る、その時が気持ちよかった。間違った選択だが、彼は銃声を聞くことで自分の無力感に勝ち、ロマンを感じたのである。

それと似たように、三つ目と四つ目の物語も尊厳と暴力の話である。三つ目の女性のストーリーは、一言でいうなら「尊厳」の問題である。風俗業で働いた女性が、人間の尊厳を傷つけられ、生きていく価値を守ろうとしたときに、自分が受けた暴力に対して、暴力で返してしまった。四つ目は、隠された暴力である。工場やナイトクラブの給料はどうなっているの

か、誰が家族の家計を支えているのか、直接的な暴力ではない、隠された暴力である。

武俠小説や映画には、敵をやっつけたり復讐したりする、いわゆる暴力によるカタルシスが表現されるが、「罪の手触り」の暴力は、カタルシスが目的ではなく、なぜこの事件が起こったのか。その背景を理解したくて描いたものだと言監督が語っている。中国の世論も、罪を犯した彼らを理解しているのではないかと私は思う。人が生きている社会は複雑だから、善悪だけではわからないと、もちろん、司法の上では結論が出たが、映画を通じて、起きてしまった出来事をまた別の視点でもう一度考えるようになった。

## 【「本や映画の紹介」作品例2（学生B）】

### トットちゃんとトットちゃんの出会い

トットちゃんは少し変わっているが、とてもかわいい女の子である。『窓際のトットちゃん』は黒柳徹子さんが自分の小学生時代通っていた「トモエ学園」での生活を中心に書いた、ノンフィクションの自伝であり、トットちゃん（黒柳さん本人のこと）の「トモエ学園」でのいろいろなエピソードで構成されている。

トットちゃんは一般の小学校に通っていたが、授業中に机の蓋を何度もパタパタ開け閉めしたり、窓の外のチンドン屋さんやツバメと話したりして、学校で問題児とされた。退学したトットちゃんは、ユニークな教育方針を持った「トモエ学園」に転校し、そこで校長である小林宗作さんと、いろいろな友達と出会い、のびのびと成長することが出来た。「トモエ学園」は生徒数60名程度の極めて小規模な学校であり、教室がすべて廃棄された電車で改造され、教室内で席も指定されていなかった。また、時間割もなく、毎朝先生が黒板に一日の学習内容を書き、何からどう勉強するか

は、子ども自身の判断に任された。授業も基本的に自習の形で行われ、子どもがわからない時だけ、先生が助けに行くスタイルである。この学校を創立した小林校長は、独特な教育理念を持つだけでなく、非常に優しい人でもある。彼はそれまで疎外感を感じていたトットちゃんを元気づけるために、いつも彼女に「君は、本当は、いい子なんだよ。」と話した。そして彼女が「問題行動」を起こしても、怒ったり、止めさせたりせず、子どもの考えを十分尊重し、彼女を温かく見守り、正しい方向に導いた。

トットちゃんの物語は世界中に広く愛され、日本の戦後最大のベストセラーになっただけでなく、中国でも大ヒットし続けた。『窓際のトットちゃん』の中国語版は2003年に発売され、2017年に発行部数が1000万部も超え、日中関係が冷え込んで、日本関係の本が書店店頭から消えたときも「トットちゃん」だけは堂々と書店に並べられていた。トットちゃんのヒットの理由として発行当時（1981年）の社会背景（「徹子の部屋」の絶頂期、障害者への完全に平等な教育がなされていないことなど）もあるが、小林校長の教育理念の素晴らしさも非常に重要である。小林校長は、「子ども中心」、子どもの関心や感動を大切に、自由で新しい教育を目指そうとする「大正自由主義教育」運動の一人であり、「トモエ学園」もその考え方に則って作られた。小林校長はこう言ったことがある。

「どんな子も、生まれたときにはいい性質を持っている。それが大きくなる間に、いろいろな周りの環境とか、大人たちの影響でスポイルされてしまう。だから、早くこの『いい性質』を見つけて、それを伸ばして個性のある人間にしていこう」

「子どもを先生の計画にはめるな。自然の中に放り出しておけ。先生の計画より子どもの夢のほうがずっと大きい」

彼のこのような、子どもの個性や自由、そして夢を大切にする教育方針こそが、世界中で長年人気を引き続けた理由であろう。

私がトットちゃんとお会ったきっかけは、私のニックネームも「トット

ちゃん」だったことであった。本のタイトルに興味を持った父が、当時小学校一年生の私にこの本をプレゼントし、毎晩読んでくれた。その時、父にあまりにも自由に育てられていた私は、学校でなかなか落ち着いて授業が聞けず、見た目もかなりだらしなかつたので、トットちゃんと同じく、学校で少し「変わった子」だと思われていた。そのため、先生にも好かれず、友達もほとんどいなかった。本来なら、このような学校体験で、私は学校が大嫌いになるはずだった。しかし、トットちゃんが私に「トモエ学園」のこと、小林校長のことを見せ、「こんなに楽しい学校もあるよ」ということを教えてくれた。それを知ったからこそ、私は学校に対して期待を持ち続けることが出来た。そして「私もこのような学校に通いたい！このような先生がほしい！」という憧れができ、その憧れがだんだんと「私もこのような学校を作りたい！このような校長先生になる！」という夢に変わってきて、私を教育学部に導いてくれた。

このように、中国のトットちゃんは、日本のトットちゃんとの出会い、中国でも「トモエ学園」を作りたいという夢を持つようになった。そして、その夢を実現させるために、中国のトットちゃんは、日本で教育を勉強し続けている。

## 【エッセイ「日本語とわたし」作品例1 初稿（学生A）】

### （タイトル未定）

皆さんご存知の通り、日本語の仮名文字は母音に基づき縦に五字、子音に基づき横に十字ずつ並べたから、「五十音」というものができた。五十音の学習は日本語学習の第一歩とし、基礎の中の基礎とも言われている。こうした背景の中、近年の中国には、「四十音」または「四十音選手」という言い方もよく耳にする。

「四十音」という言葉の意味から言うと、五十音よりも十個の仮名がかけている状態を表し、日本語の基礎さえも確実に身につけていない人たち

のことは、勿論、「四十音選手」と呼ばれ、つまり、皮肉な言い方である。

日本語を習熟してから来日するのは、多くの人々の頭の中ではそれは当たり前のようなことだが、現実には必ずそれに限らない。中国の場合、国内の大学に通って就職や更に進学するのは普通だ。海外留学は巨大な風険に伴い、よく「最後の道」「やむを得ず時の選択肢」と見られている。なぜなら、海外留学はまず金銭面の負担があり、そして海外大学に対する、中国国内の普遍的な認識不足の元に、いくつかの名門大学に入らなければ、将来帰国就職の時、あまり益にはならない。かつて日本と中国は歴史問題などの原因で、日本を留学先として選ぶ人は別の国より少ないのが現実である。(未完)

## 【エッセイ「日本語とわたし」作品例1 最終稿 (学生A)】

### 日本語と私

日本といえば、まず不思議な国だと思う。日本と中国は文化、話し方、考え方などは随分違うような気がする。もう五年間日本語も勉強しているのに、まだまだ知らないことが多すぎる。

まず、日本語は話し方が興味深いと思う。中国では普段敬語あまり使わないので、場合によって丁寧な言い方を使ったほうがいかにだけた言い方を使った方がいいかはよくわからなくなるのである。それだけではなく、日本語の話し方は男女によっても違う。たとえば、男性の場合、文末は「る」から「ぞ」や「ぜ」などに変換することはよくある。それに対して、もし女性がそんな言い方を使えば日本人はびっくりするはずだ。

二つ目、日本語では「言わなくてもわかる」表現も多いのである。日本人と日常会話をするとき、私が「すみませんが、今夜はちょっと忙しいので…」と言ったら、最後まで言わなくても相手は私がいけないとわかるはずだ。そんな風に私は失礼にならないように気をつけている。だから、「空

気」ということがわかり始めたのはどんどん日本語が上手になっていき日本の社会に溶け込んだ証ではないだろうか。

三つ目、日本人の考え方も日本語から表れてくる。話すときに、必ず相手の気持ちを大切にしなければならない。相手が恥ずかしくならぬために、日本語では「いいえ」や「嫌い」などをストレートに言うのは難しくて滅多にないことだ。自分は日本語を習う前に、そんなことを考えなかったので、「イエス」か「ノー」かをはっきり言うタイプなのに、日本語を勉強したら、そんな簡単に言えそうなことがわりとだんだんできなくなった。

これからは恐らく長期間日本に滞在するから、日本の言語、歴史、文化だけでなく、日本人の考え方や日本語の裏側に潜んでいる表現と意味についてももっともっと知りたいのだ。自分の考え方もそれによって変わるかもしれないが、日本語をさらに勉強すればするほど、知らないことが増えてくる、その不完壁さこそは、自分の動力源だと考えている。

## 【エッセイ「日本語とわたし」作品例2 初稿（学生E）】

### 日本語と私

最初に、日本語と出会ったときは、中学校の第一学期であった。多くの外国人と同じように、その媒介は日本のアニメであった。初めて日本語のセリフを聞いて、字幕を見ながら、すべてのエピソードを見たアニメは「青の祓魔師（エクソシスト）」というアニメであった。とても熱いアニメで、その時の私が引かれた。その後、中学時代の私は、優秀な日本のアニメ作品を見ながら、日本語の発音を聞き慣れた。高校に入り、日本語のゲームをやりはじめ、そのゲームを通じて、日本の剣に興味を持ち始めた。「太刀」「天下五剣」などの言葉を覚えた。その同時に、ゲームの背景として、日本の古代史を少し習った。「織田信長」、「豊臣秀吉」などの戦国大名の

名前も覚えた。

正式に、日本語を学び始めたのは、日本への留学を決めた三年前の夏であった。五十音から始め、中国の日本語学校で4か月の勉強を終え、日本語能力試験に参加した。それから4か月後、私は日本へ来た。アニメの中で描かれた日本の街並みと風景は確かに、私の目の前に現れた。そして、日本で日本語の勉強を継いで、大学入試に参加し、最終的には名古屋大学の法学部に入学した。

大学に入った私はさらに難しい学術的な日本語と関わった。法学自体の研究は日本語能力の一層ハイレベルを要求し、初めてから接触する簡単な日常用語が、今の法律用語に進化した。

三年の日本語勉強を通じて、習ったのは単なる日本語を運用する能力のみならず、最も重要なのは、日本と云う国への理解を深めたことである。日本語を第二外国語として、第一外国語である英語と連携し、さらに世界が広がる。最初の日本語を勉強し始めたのも世界をもっと広く見たいからだ。中学時代と高校時代のときに、私にたくさん楽しみを与えたこの言語にまだまだ勉強する余地があるだろう。

## 【エッセイ「日本語とわたし」作品例2 最終稿 (学生E)】

### 私と日本語

日本語を勉強してから3年になった。習った言葉の数はもう自分でも数え切れないほどふえてきた。その中で、一番美しいと感じるのは、「三日月宗近」である。それは一振の刀の名前である。「三日月」というのは、あの時期の月の姿を表す言葉で、「宗近」とは、その刀を作った者の名前である。「三日月宗近」という名前が付けられたこの刀は「三日月」のように、美しく日本の「天下五剣」の中で一番綺麗だといわれている、

最初に日本の刀剣に興味を持ち始めたのは、高校の時だった。当時の高

校では、「刀剣乱舞」というゲームが大人気となった。もともとゲームに興味なかった私は、友人と共通な話題を持つために、このゲームをやり始めた。「三日月宗近」はそのゲームの看板であった。刀の名前はひとの名前と異なり、発音も普段聞こえる日本語と違う。そのゆえに、ゲームを通じて、刀剣の名前を覚えるのはとても面白かった。高校時代の私に、多くの楽しみを与えた。

ゲームの中でアニメキャラクターの顔のみ見られる。その本体とようやく私が日本へ留学したときに会った。受験勉強の際に、神社の宝物館や博物館で、かつて名前だけ憶えている刀の本体が目の前に実際に現れた。思った以上に、美しい姿であった。

ゲームの設定によれば、刀がその持ち主の意志を引き続いた。現実の本体を見れば、そのように感じられる。日本文化の中でかなり重要な地位を持つサムライの文化そのものが私に引かれたかもしれない。自分の命を潔く切り捨て新しい時代に進んでいく姿に美しさがある。その意志の象徴として、残る実体は刀剣である。それを見るだけで、私に前に進む勇気が与えられたように感じるから、私がこれほど日本の刀に溺れるだろう。

### 【エッセイ「日本語とわたし」作品例3 最終稿（学生B）】

#### 温かい言葉

「みう、他の人がサーブ失敗したとき、何でみんないつも『おいしい』というの？」

「Bちゃん、それは『おいしい』じゃなくて『おしい』だよ。『後ちょっとで成功するとこだったのに、残念だね』という意味。」

これはX〔原文では高校名〕高校二年の体育の授業での会話であった。「Bちゃん」は私、中国からの交換留学生。「みう」はその時の親友、いつも日本語や日本の文化を教えてくれる優しい女の子である。そしてこの会



話は私が「おいしい」という言葉との初めての出会いであった。

私は「おいしい」という言葉が大好きだ。確かに「おめでとう」や「大好き」などと比べると「おいしい」はあまり好ましいことではないかもしれない。しかし「おいしい」には失敗した人への優しい心遣いがある。「結果は好ましくなかったけど頑張ったね!」「今回は失敗したけど、あと少しでも成功するとこだったから、次は絶対出来るよ!」などの深い意味合いがこの言葉に潜んでいる。

私自身もこの言葉の大きな受益者である。運動神経がないため、日本での体育の授業は私にとって失敗だらけの悪夢だった。テニスもソフトボールもマラソンもすべて大失敗だった。そのたびに日本のクラスメートが「おしかったね!頑張れBちゃん!」と温かく励ましてくれた。そのおかげで体育の時間を楽しむことが出来た。みんなが私を見守って、私の努力を認めてくれていると感じたからであった。

「おいしい」の他にも、食事の前の「どうぞ」や帰宅後の「お帰り」など、日本語特有の温かい言葉が沢山ある。これらの言葉にある深い優しさは辞書を引いてもわからないものである。日本の文化に触れ、日本を自分の身で感じて初めて理解できるのだ。無論、すべての言葉に潜んでいる意味を理解するのは不可能に近い。しかし、一つでも多く知れば、生活の中の幸せは増えるのであろう。私はこれからも日本での生活を続け、温かい言葉を沢山知り、味わいたい。そしてこれらの言葉を使って、周りの人にも温かさを与えたい。

